

に満ち渡る都人士の心は將に花より去りなんとす恰も好し我中央大学は去る四月二十四日春季陸上大運動会を挙行しぬ前日來の春雨も打ち霽れて絶好の運動会日和中野原頭萌え出つる千千の若草緑小さき葉末に滴る水玉に朝日麗かに七色を映し春風なよやかに木葉を払ふ実には春なるかなと思ひつつ場内を見渡せば正面会長席を中心に左右五棟六棟雪白の天幕赤横線の幕打張り整然と立ち並ひたり早や委員の來りて右往左往に奔走するあり場の一隅には湯沸しに忙はしき人夫も見ゆ兎や角する内準備全く終りぬ唳唳たる楽隊は勇勇しき「リズム」を中野の原に送り空飛ぶ鳥も之に和し道行く子等の唱ふるもあり犇犇と集り來る学生觀衆、正しく場内は緊張しぬ愕然轟く一発の砲声響き渡り微に彼方に消え失せん頃劈頭二百米突も競走者は決勝点にと到著しぬ嗚呼我三千の健児日頃の「ペン」と「ブック」を打ち棄てて一日の快を貪らんとはすなり健児の心や称すへし意氣衝天英雄しき妙技一つとして可ならざるはなし競技は進行しぬ「ラニンング」競争の速力を争ふあり兎飛、毬拾、砲丸投、戴囊蟹競争、航海、網登り競争等の技を主とするものあり英語綴、暗算競争等の智を主とするものあり巡礼、仮装、抽籤、麵麩食、盲啞、天狗、サツク競争等の滑稽顯を解かしむるもあれは勇しき障害物競争に觀客の肝も失せよと許り猛烈なるもあり風にひらひら大宮人のすなるへき千鳥競争提灯競争も見えたり競技中煙火は絶え間なく打上けられ運動タイムス又發行頻なり内に一文あり曰く欧米の動乱は愈々拡大して低止する所を知らず東洋の風雲又將に土を卷て起らんとす独り我日本帝国は四海波靜に

426 中央大学運動会

〔『法学新報』第26卷6(298)号 大正5年6月3日〕

○中央大学運動会 新緑微かに春の天地を飾り茫漠の氣武蔵野

して万民太平を歌ふ時今や春たけなはにして桜花燦爛津津浦浦花ならさる所なく国民の意気洋洋たるものあり是れ豈我大和民族か開国以来涵養し来れる大和魂を發揮して世界人類を指導する時ならずとせんや吾人の大飛躍大活躍は正に此時に在り我れ三千の健児は英気を伸へ精神を養ふ為め爰に大運動会を開催せらる云云諸君元気を振作し全身の勇気を尽して身心の鍛練を怠り給ふなかれ嗚呼大飛躍なる哉、大活躍なる哉、午後一時觀衆場内に満ち満ちて立錐の余地なく各科の仮装行列此時現はれ滑稽奇抜抱腹絶倒喝采至らさるなく就中商科三年最も秀てたりと称せらる小学生徒の「ランニング」は短く少さき足もて走る様さなから小石を転はすか如く中学選手専門学校選手は觀客の視線を集め悠然「スタート」に立ちはやる心押し鎮め号砲遅しと待つ間もなく奮然飛走前となり後となりぬる程に勝敗は定りぬ其成績は左に掲ぐるか如し優勝者の得意思ふへし頃しも午後四時なりけり場内俄に色めき高唱中野の原を圧して赤白青の小旗手に打振り応援の歌各所に起り觀衆亦之に和すあはれ対科選手競争の始らんとはすなり己か科の勝利を夢み年来商科の有せる優勝を敗らんとする法、経科の意気名状すへくもあらず時至り選手は正に「スタート」に立ちぬ号砲鋭く天を衝き選手は飛走しぬ一週二週愈々応援猛烈にして勝敗又予測し難し赤白赤の順序は赤青青と変し青赤青と移り遂に月桂冠は赤商科選手寺島君に落ちぬ次で経済小野君商科野呂君の結果となり法科消然として言ふ所なし美美しき花輪は寺島君に渡り商科は覇権を持続しぬ法経選手一番努力他日を期する覚悟眉宇に見はれたるもこ

とはりなり最後に千二百米突競争勝野、菊地、丹下の入賞者を出し競技終了するや伊藤理事散会を宣告せられ同理事発声一同中央大学の万歳を三唱し運動会は全く終了す時に午後六時永き春の日夕陽微に薄雲たなひく頃三三五五樂しかりける今日の日を語りつつ家路にと急ぎぬ因に入賞者其数多き中に就て特筆すへきものは左の如し(千草生)

第六十五回各中学選手競争

第一回 一、青山師範学校 二瓶(一分卅七秒)

二、高輪中学校 仮谷(一分卅九秒)

三、豊島師範学校 内田(一分四十秒)

第二回 一、成城中学校 豊田(一分卅六秒五分ノ一)

二、高輪中学校 松井(一分卅七秒一分ノ一)

三、豊島師範学校 山田(一分卅八秒二分ノ一)

第六十六回専門学校選手競争

一、早稲田大学 十河(一分卅五秒二分ノ一)

二、早稲田大学 岡田(一分卅七秒)

三、農業大学 寺町(一分卅九秒)

第六十七回対科競争

一、商科 寺島(二分五十八秒)

二、経済科 小野(貢)(二分二秒)

三、商科 野呂(三分三秒)